

肥後象嵌・制作工程

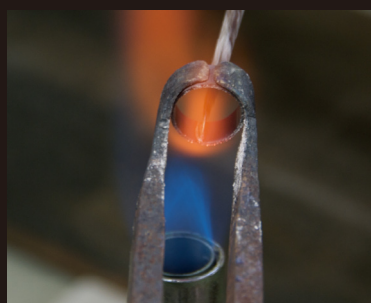
「光助」作

肥後象嵌（ひごそうがん）とは熊本県熊本市を中心に、江戸時代初期より受け継がれてきた金工品です。主要素材である鉄に純金や純銀を打ち込み、肥後独特の象嵌技法で、刀の鐔（つば）や小柄（こずか）などに象嵌が施されました。この装飾されたものを身にまとう事で、江戸時代は武士のダンディズムの象徴であったといわれています。象嵌の「象」は「かたどる」、「嵌」は「はめる」という意味があり、鉄の板の表面に細い切れ目をつけ象り、その溝に金や銀など別の金属を嵌め込んで、様々なものに装飾を施します。塗料を使わず、鉄のサビから生まれる地鉄の漆黒に、金で施された模様は上質で奥ゆかしさを感じられます。約400年継承された日本の伝統工芸「肥後象嵌」を万年筆で身近にお楽しみください。



① 布目切り

地鉄にタガネで一本一本細かく刻み、縦横方向を変えてやすり状の布目を切り、帯状に加工し丸めます。



② 鑑付け

丸めた地鉄を高度な技術にて鑑付けし、円柱状に仕上げます。



③ 象嵌(配置)

純金板から型抜きした花びら、葉、つぼみ等を絵柄に合わせ配置し、細工に最適な鹿の角で打ち込みます。



④ 象嵌(打ち込み)

線は、金線を曲げながら打ち込む繊細な作業です。円柱状の局面への象嵌は特に熟練した技巧が必要です。



⑤ 赤サビ出し

象嵌された地鉄をムラなくサビさせます。サビ液を塗り、火であぶる、これを2日にかけて3回繰り返して十分に赤サビを出します。地鉄の美しさを生かすための、肥後象嵌独特の技法です。



⑥ お茶炊き

お茶を煮立て、赤サビの出た地鉄を入れた器の中に素早く注ぎ、17分ほど煮立てます。お茶のタンニンがサビを止め黒変させ、肥後象嵌独特の重厚な黒の地鉄に仕上がります。



⑦ 磨き

象嵌のくもりを磨いて綺麗にし、油を煮立てた中に3分ほどつけ、拭き上げます。黒い鉄の部分は磨き棒が当たると白化し傷になるため、熟練した技巧が必要な繊細な作業です。



⑧ すじ打ち

最後の仕上げとして、象嵌に装飾を施します。花や葉、花卉などをすじ打ちするという極めて繊細な手先の技術が必要です、熟達の職人技が惜しみなく注がれています。



⑨ 完成

塗料などいっさい使用しない自然のままの素材、赤サビから生まれた地鉄の美しい黒と純金の華麗な装飾、肥後象嵌独自の技法の完成です。

